「サエ」と「デサエ」
―その構文と意味―

市　川　保　子

要　　旨

「そんなことは、子供さえ知っている。」の「サエ」を「デサエ」に代えて、「そんなことは、子供でさえ知っている。」としても二つの文は意味的には殆ど変わらない。しかし、「彼さえ来ればすべてわかる。」の「サエ」を「デサエ」に代えて、「彼でさえ来ればすべてがわかる」とすることはできない。

実例を観察していくと、「サエ」と「デサエ」は色々な面でその振る舞いを異にするのがわかる。本小論はどのようなときに「サエ」が現れ、「デサエ」が現れるかを観察、考察することを目的とする。「デサエ」は断定の助動詞「ダ」の連用形＋「サエ」でありながら、それにとどまらず、一つの助詞としての意味、機能も合わせ持つと考えられる。終節では「デサエ」が「ハ」に近い主題機能を持つか否かについても考察を加える。

[キーワード]　取り立て助詞、並列例示、超格（無格）的、主題的、
断定の助動詞「ダ」＋「サエ」

1．はじめに

アメリカ・カナダ大学連合日本研究センターの日本語教科書『INTEGRATED SPOKEN JAPANESE Ⅰ』の第３課の指導項目「サエ」のところに次のような参考例文が上がっている。

(1)A：忙しいかい。
　B：うん。新聞を読む暇さえないよ。

(2)A：北海道の地震はすごかったようですね。
　B：ええ、死んだ人さえあったそうですからね。

(3)A：日本人の名字の読み方はむずかしいですね。
　B：ええ、日本人でさえ困ることがありますからね。

(1)(2)では取り立て助詞「サエ」が、それぞれ名詞「暇」「人」の直後に来ているのに、(3)では「デ」が名詞「日本人」と「サエ」の間に介在している。しかし(3)において、「デ」を除いて、「日本人さえ困ることがありますからね」としても文としては成立する。一方、(1)(2)に「デ」を用いて、「新聞を読む暇でさえない」「死んだ人でさえあった」とすると不自然な文ができる。

「そんなことは、子供さえ知っている」「そんなことは、子供でさえ知っている。」では、「サエ」と「デサエ」の両方が可能である。「15世紀には火薬さえ伝えられた。」はいいが、「15世紀には火薬でさえ伝えられた。」は少し落ち着きが悪い。

本小論は、どのような条件のもとに「サエ」が現れ、また、「デサエ」が現れるかを、構文論的

及び、意味論的に考察することを目的とする。2で「サエ」と「デサエ」の位置付けについて概観し、3で「サエ」と「デサエ」の現れ方の異なりを実例を通して観察する。4では、その観察を通し何故そのような異なりが起こるのかを考察する。

本小論では従来、係助詞または副助詞に分類されていた助詞を一括して取り立て助詞とする立場をとる。従って、「サエ」は「ハ」「モ」「コソ」「ダケ」「シカ」などと同じく取り立て助詞と呼ぶことにする。

2.「サエ」と「デサエ」の位置付け

「サエ」の意味は普通、三つに分けられているようである。次は『日本文法大辞典』及び『日本語教育事典』の「サエ」の項を引用したものである。(例の一部を略す)

『日本文法大辞典』

さえ　①極端な場合を例示して、他の場合も当然であることを類推させる。

例　専門家の彼（で）さえ知らなかった。／あなたにさえわからないものが、どうして私にわかるでしょう。／目の前にみせられてさえ、まだ信じられなかった。

体言につく場合には、「でさえ」になることもある。

②そればかりでなく、さらに加わる意を表す。「・・・まで」の意。

例　雨ばかりでなく、風さえ吹きだした。／子供たちを御馳走してくれたうえに車で送り届けてさえくれた。

③「・・さえ・・ば」と、条件句の中で用いられ、ある事柄についてその条件が充足すれば、その事柄が成立する意を表す。

例　金さえあれば、何でもできると思っている。／練習しさえすれば、じょうずになる。

『日本語教育事典』

①ある事物を、同類中極端なものとして強調的に示し、そのことによって、同類の他のものについても当然同様の事柄が成り立つことを暗示する。「病気で水さえのどを通らない」、「散歩する暇さえない」「自動車に乗ってさえ小1時間はかかる」などがこれである。

②程度の激しいものが更に付け加わるといった意味を表す。「寒いだけでなく、雪さえも降ってきた」などがこれである。

③「～さえ～ば」といった形で、ある事態が成立するために必要な条件、若しくは、その条件を特立、排他的に取り上げる。「暇さえあれば、本を読んでいる。」「彼が来さえすれば、全て分かる。」などがある。

〔注〕ガ格やヲ格を取り立てるとき、「でさえ」の形で使われることがある。「水でさえのどを通らない。」「悪人でさえ許す広い心の持ち主」

『日本文法大辞典』では①の項に「体言につく場合には「でさえ」になることもある」という注が、『日本語教育事典』には「ガ格やヲ格を取り立てるとき、「でさえ」の形で使われることがあ

る」という注が付けられている。しかし、両者ともそれ以上の説明はなされていない。

「デサエ」の成り立ちについては、次のいずれかの場合が考えられる。

①一語として取り立て助詞「デサエ」と考える場合

取り立て助詞はその特徴の一つとして文の色々の構成要素に付くことができる。

「サエ」と「デサエ」の接続の仕方のずれについては、次の節で考察するが、「サエ」は名詞＋格助詞のみならず、活用語の連用形にも付きうるのに対し、「デサエ」は次のように付くことができない。

(4) a．叱られなかったばかりか賞められさえした。

b ＊叱られなかったばかりか賞められでさえした。

(5) a．珍しいのはもちろん、面白くさえあった。

b ＊珍しいのはもちろん、面白くでさえあった。

このように文中での接続が自由でないという点で、「デサエ」を一つの取り立て助詞と位置付けることは無理なようである。

②格助詞「デ」＋「サエ」と考える場合

(6) a．これは地方でさえ見られる現象だ。

b．これは地方で見られる現象だ。

(6a) の「デサエ」は場所を表す格助詞「デ」に取り立て助詞「サエ」が承接したものと考えられる。取り立て助詞「サエ」を除いても、(6b) のように文として成立する。

(7a) の「デサエ」においてはどうであろうか。

(7) a．水でさえのどを通らない。

b ＊水でのどを通らない。

(6)と同じく「サエ」を省くと、(7b) のようになって文が成り立たない。取り立て助詞は格構造には直接関与しない助詞であるから、もし「水でさえ」の「デサエ」が格助詞＋取り立て助詞「サエ」であるなら、「サエ」を取り除いても文が成立するはずである。従って本小論で問題にする (7a) のような「デサエ」の「デ」は格助詞とは考えられないということになる。

③断定の助動詞「ダ」の連用形「デ」＋「サエ」と考える場合

結論から言うと筆者は基本的には③の立場をとる。今見たように①②の立場が成り立たないから、残った③であろうという消極的な理由とともに、③であると考えるにふさわしい根拠が得られるからである。「基本的には」としたのは、「デサエ」が、成り立ちは断定の助動詞「ダ」＋「サエ」であるが、それにとどまらず、一つの助詞として助詞化した部分を合わせ持つという立場をとるからである。それについては以下の考察に任せ、ここでは筆者が基本的には③の立場を取ると言うに止どめておく。

3. 観察

3. 1 「サエ」と「デサエ」の接続の仕方

先に述べたように、「サエ」は取り立て助詞の持つ共通の特徴として、種々の文構成要素に後接してその語を取り立てることができる。「デサエ」はどうであろうか。まず、種々の格の取り立てから見てみよう。

「ガ」格 (8) a．夫婦喧嘩は、犬さえ食わぬ。

b．夫婦喧嘩は、犬でさえ食わぬ。

「ヲ」格 (9) a．お前は我が子さえ信じられないのか。

b．お前は我が子でさえ信じられないのか。

(8)(9)のように「ガ」格、「ヲ」格では「サエ」「デサエ」とも名詞に直接付いてその語を取り立てる。しかし他の名詞＋格助詞に対して「デサエ」は付いたり、付かなかったりする。

「ニ」格 (10) a．家族にさえ知らせず旅に出ました。

b ＊家族にでさえ知らせず旅に出ました。

「へ」 (11) a．貧しくて小学校へさえ行けなかった。

b ＊貧しくて小学校へでさえ行けなかった。

「ト」 (12) a．彼は社長とさえ物おじせずにしゃべる。

b 彼は社長とでさえ物おじせずにしゃべる。

「カラ」 (13) a．親の目からさえまぶしく見えた。

b 親の目からでさえまぶしく見えた。

この「デサエ」の付き方は強調構文、転位文などと呼ばれる「・・のは名詞Nだ」の「Nだ」のところに現れ得る格助詞と一致する。

(10)' ＊知らせずに旅に出たのは家族にだ。

(11)' ＊貧しくて、行けなかったのは小学校へだ。

(12)' 彼が物おじせずにしゃべるのは社長とだ。

(13)' まぶしく見えたのは親の目からだ。

このように、「デサエ」の付き得る格助詞は、断定の助動詞「ダ」の取り得る格助詞と一致すると考えられる。

「ト」においては、引用の「ト」の場合は、「デサエ」は付かない。

(14)彼らは借りた金を返さなくてもいいとさえ思っているらしい。

＊でさえ

また、トキ格の場合は、次の例文のように「デサエ」がトキを表す語に直接に付く。

(15)立山では夏でさえ雪が降る。

(16)科学の進んだ今日でさえ迷信がはびこっている。

2でも触れたように、名詞または名詞＋格助詞以外の場合、例えば用言に割って入る場合などでは、「デサエ」は不可能である。

⑰a．せっかく買ってきたというのに、陽子は見向きさえしない。

b＊せっかく買ってきたというのに、陽子は見向きでさえしない。

⑱a．御馳走をしてくれたうえに、車で送り届けてさえくれた。

b＊御馳走をしてくれたうえに、車で送り届けてでさえくれた。

以上のように、「サエ」は種々の構成要素に付くが、「デサエ」は名詞か、名詞＋格助詞の一部にしか付かない。（実際の収集例の中では「ガ」格に「デサエ」の付く例が圧倒的に多かった。）格助詞との接続の仕方は、「デサエ」の「デ」が断定の助動詞「ダ」の連用形だと考える一つの根拠となると考えられる。

3.2　「サエ」と「デサエ」の構文的特徴

前節では「サエ」と「デサエ」の、文の構成要素への接続の仕方を観察した。「サエ」と「デサエ」は接続の仕方だけでなく、構文的にも異なった振る舞いをする。

本節では、以下次の順に、両者の構文的特徴について観察していきたい。

3.2.1　「・・さえ・・ば」節

3.2.2　「・・のだから」「・・のに」節

3.2.3　並列例示

3.2.4　「デサエ」の超格（無格）的用法

3.2.5　先触れ文との共存

3.2.6　述語と「デサエ」

3.2.7　取り立てのスコープ

3.2.1　「・・さえ・・ば」節（最低条件を示す）

「サエ」の持つ意味の一つに「・・さえ・・ば」と条件句の中で用いられ、ある事柄についてその条件が充足すれば、その事柄が成立する意を表すものがある。これを短く「最低条件を表す場合」とすると、最低条件を表す「・・さえ・・ば」節では、「デサエ」は「サエ」に取って代わることができない。

⑲月さえ出れば提灯はいらない。

＊でさえ

⑳利息さえ払えばいいんだろう。

＊でさえ

㉑ここからさえ出られれば、後は何とかなるのだが。

＊でさえ

3.2.2　「・・のだから」「・・のに」節

一つの例を出し、「それが・・なのであるから、他も・・であるのは当然だ」また、「それが・・

であるのに、他のものが・・でないのはおかしい」という意味内容を表す、「・・のだから」「・・のに」節について、次に考えてみよう。

㉒大人でさえ胃腸を損なうことが多いのですから、敏感な赤ちゃんの胃腸はちょっとした異常
？さえ
にも影響され、たちまち下痢を起こしてしまいます。　（現代語の助詞・助動詞 55ペ）

㉓君でさえそう思うのだから、何とも仕方がない。
？さえ

㉔無断で実家へ戻るのは喜和のわがまま、と楠喜でさえ大貞の顔を立てているのにここで喜和が否やの言える道理はない。　（櫂 210ペ）

「Nでさえ・・のだから」、また、「Nでさえ・・のに」の中では「デサエ」の代わりに「サエ」を用いると、非文法的とは言えないが、落ち着きの悪い文が出来る。これらの文はしばしば強調表現となるが、「デサエ」がおさまりやすいということは、「デサエ」が「サエ」より強調的意味合いを持つと考えることができる。

3.2.3　「並列例示」

「デサエ」は次の例のように並列文に現れるが、「サエ」にはその用法はない。

本小論では、2文以上の文が連用形、接続助詞「テ」及び「シ」などで結ばれ、2文の主語の異なる文を「並列文」と呼ぶことにする。そこでは、異なった主語が並列的に並び、述語に同じ内容の状態、動作が来る。

㉕彼の実兄でさえ、「物好きなやつめ」と笑っていたし、大学の東洋美術の先生の中には「江
＊さえ
戸時代の日本美術は中国の亜流」と切り捨ててはばからない人もいたのである。
（日本経済新聞 '87,3,17）

㉖喜和は、楠喜でさえ陽き楼の名を聞いただけで日頃とは打って変わってすぐ岩伍の出世を言
＊さえ
い出し、岩伍もまた、「陽暉楼」あたりへ奉公すりゃあ、女子でも心掛け次第で出世が叶う」などと言うのを聞いていると・・　（櫂 53ペ）

㉗あれほどまめまめしかった喜和でさえ綾子にかまけ切って平気で釜屋の用事の手を抜いてい
＊さえ
て、それを又、かんしゃく持ちの龍太郎でさえ文句のひとつ言わず、一緒になって綾子に目を細める。　＊さえ　（櫂 319ペ）

3.2.4　「デサエ」の超格（無格）的用法

実例の中には、「デサエ」の取る格を特定しにくい場合がある。次の㉘～㉚の「デサエ」は格を特定しにくく、無格的に使われている。ここで「デサエ」の代わりに「サエ」を使うと文が不安定になる。

(28)それから幾百年の間というもの、文字はもっぱら商業上の契約を作製したり、オリンピアの勝者の名を記録したりするのに用いられるだけで、法律でさえこれが成文となったのはずっと後代のことであった。　？さえ　(零の発見 84ペ)

(29)蛍でさえこの淵の上にだけ大きな鬼蛍が飛び交うと言うのも、怖いとは知りながら魅入られたら逃げられぬ、その水の蒼さのせいなのかも知れなかった。　？さえ　(櫂 454ペ)

(30)食べ物でさえ綾子は変わっており、・・べろ羊羹、黒飴、ねじりん棒から金米糖、割箸で巻く水飴など一切口にせず、・・　？さえ　(櫂 312ペ)

上の例は全て、N＋「デサエ」をまず文頭に掲げ、次の文でそれについて説明を加えるという形を取っている。ここではN＋「デサエ」が主題的役割を果たしていると言える。N＋「デサエ」を文に戻しても格を特定することが難しく、従ってここでは「デサエ」が超格的、無格的に用いられていると考えられる。

3.2.5　「先触れ文との共存」

実例を観察していると「Nデサエ」を持つ文は、それに先立つ文にNについての言及のある場合が多い。また、「Nデサエ」を持つ文においても、Nを説明する連体修飾節が先行する場合が多い。前文、また、連体修飾節でNについて何等かの情報が紹介され、その情報には何等かの評価が含まれている場合が多く、次の文で「その評価を持つNでさえ・・・である」という判断がなされる。次の(31)は先立つ文による、また(32)は連体修飾節によるNへの言及の例である。

(31)さすがに東大からは何も聞いてこなかったというが、資料によると、東大でさえ科類によって一割弱から四割の水増しが必要という結果が出た。　？さえ　(読売新聞 '87,3,6)

(32)内蔵頭兼少将で二、三の供御所も管理し、父の大納言言綱も健在だった山科言継でさえ、麦飯持参の訪客を得ている。　？さえ　(米と日本人　76ペ)

(31)では、「さすがに・・・というが」までが、前文として次の「東大でさえ」以下の先触れ的な役割を果たしている。一方、(32)では、「内蔵頭兼少将・・・健在だった」までが「山科言継」を修飾している。

次の例も同様で、「Nデサエ」の前にNに関する言及がある。

(33)フランスの場合にはこれらの場合と少し違うが、そのフランスでさえ、アメリカの意に反する体制を作りえたかどうかは、きわめて疑問である。　？さえ　(国際政治　94ペ)

(34)慶応は、裏口入学のない大学、入試の厳正な私学の名門という世間一般の評価をえていた。

それだけに「あの慶応でさえ」という衝撃が受験生や父母の間にある。(天声人語 197ぺ)

?さえ

「デサエ」が先触れ文の中に既に出た名詞Nと共に現れやすいということ、またNについて説明、限定をする連体修飾節とともに現れやすいということは、「デサエ」が特定化されたNと結び付きやすい性質を持つと言うことができる。

次の文は民営化した日本たばこ産業の経営多角化を少し皮肉った新聞記事の一節である。

「・・商売になるとみれば、そのうち禁煙パイプさえ売り出すのでは」と、消費者の冷笑を浴びたものだ。 (読売新聞 '87,4,8)

この文では「サエ」の代わりに「デサエ」は使いにくい。しかし、この文の前に「禁煙パイプ」に関する文脈があれば「デサエ」も可能となる。

「禁煙パイプの売れ行きはたいしたもので、A社などはこのパイプのヒットのおかげで経営を持ち直したと言われている。日本たばこ産業も商売となるとみれば、そのうち(そうした)禁煙パイプでさえ売り出すのでは」

もっと簡単に文脈指示語を付けることも出来る。

「・・商売になるとみれば、そのうち、あの禁煙パイプでさえ売り出すのでは」

「あの禁煙パイプ」と「あの」を付けることによって、「今流行りの、今問題になっている」と「禁煙パイプ」を特定化し、特定化することによって「デサエ」がおさまりやすくなると言えよう。

「デサエ」の実例の中に、次のような傾向が見られたのも、「デサエ」が特定のNと結び付きやすい性質を持つためと考えられる。

①Nに「あんな、こんな」などの指示詞が付きやすい。

②Nに「私、あなた、自分、固有名」が来やすい。

①②いずれの場合も、次の例のように、「デサエ」の代わりに「サエ」を用いると文の落ち着きが悪くなる。

(35)あんな強力でさえもてぬ。

*さえ

(36)こんなおばあちゃんのあたしたちでさえ言いにくいことをはっきりと仰しゃるんですもの、・・・

*さえ

(五弁の椿 159ぺ)

(37)A男以外にも、地獄のような思いで学校に通っている子を私でさえ何人も知っている。

*さえ

(読売新聞 '87,3,16)

(38)若しかするとこの自分でさえ、世間の目からはもうすっかり玄人になりきっているのかも知れない、・・・

*さえ

(櫂 159ぺ)

(39)弟の直治でさえ、ママにはかなわねえ、と言っているが、つくづく私も・・（斜陽 279ぺ）

＊さえ

次のリストは、小説、随筆、評論などから集めた文を、前接する名詞によって「デサエ」と「サエ」に分けて列記したものである。収集例の量的なばらつきもあり、これらの例だけで結論を出すことは適当ではない。しかし、「サエ」「デサエ」に前接する名詞の全体的な傾向は伺えそうである。

「デサエ」

あんなN　あんな強力、こんなおばあちゃんのあたしたち

代名詞　私、この自分、自分、君、喜和自身

名詞　楠喜、そのフランス、あの慶応、山科言継、西郷、東大、スターリン、嘉助、岩伍、龍太郎、当の安江、大貞、米、益さん、姐さん、直治、

具体物　大人、日本人、子供達、人たち、保守党の人びと、彼の実兄、法王庁、囚人、ゴキブリ、もの（者）、からかさ、奴隷、家の者、堀木、父母、昼弁当、食べ物、人間、蛍

抽象物　精力、利己心、岩伍の四十二の厄、軍備制限、軍縮縮小、名、問題、法律、理由、寝言、

「サエ」

具体物　主人、死んだ人、女中、子供、ミシン、道具、手提げ、電気、戸口、食うもの、水、のど、刺

抽象物　話、禁止令、こと、おそれ、場合、報告、様子、きざし、意見、異名、資格、とまどい、匂い、気、気持、感じ、事実、努力、安心感、声、力、手当、記憶、体(があく)、涙、野球、コントロール、時間の繰り返し

今回の「サエ」の収集例の中には「デサエ」で見られた「あんなN」「代名詞」「名前」の例はなかった。収集例から、「サエ」及び「デサエ」に前接する名詞Nについて次のようなことが言えそうである。

N＋「サエ」　→　不定名詞、抽象物が多い

N＋「デサエ」→　特定名詞、文脈指示、具体物が多い

3.2.6　述語と「デサエ」について

次に「デサエ」と述語の関係について見ていく。述語が次のようなとき、「サエ」では座りが良いが、「デサエ」では非文法的な文になる。

(40) a．本当は、いまからではもう遅すぎるという意見さえある。

＊でさえ

b．ありもしないことを言う人さえいる。

＊でさえ

c．私は君と抱擁する資格さえないのだ。

＊でさえ

(41)あの人の言い分を聞いていると腹さえ立ってくる。

＊でさえ

(42)知子はそれを聞いて、腹立たしいような気持ちさえした。

＊でさえ

(40)は存在を表す「ある／いる」の場合である。「サエ」＋「ある／いる」の実例は多く見られたが、いずれの場合も「デサエ」に代わると不自然な文になってしまう。「ある」については「デサエ」と直接につながると、「～でさえある／～でさえない」となって、断定の助動詞「ダ」の連用形「デ」に「サエ」が割って入ったのと同じ形になる。その混乱を避けるために存在の「ある／ない」に「デサエ」が付きにくくなっていると考えられる。

(41)は慣用句の場合で、「サエ」は「腹が立つ」に割って入って「腹さえ立つ」とすることができる。一方、「デサエ」が割って入った「腹でさえ立つ」はおかしい。「道草さえ（＊でさえ）食って」「電話さえ（＊でさえ）かける」などもそうである。

(42)のような例としては「気がする／感じがする／匂いがする」などがある。慣用句とは言えないが、「・・がする」と常に結び付いて使われるという点では共通する。いずれの場合も「デサエ」が介入することはできない。

3.2.7　取り立てのスコープ[1)]

ここでは「サエ」と「デサエ」の取り立てのスコープについて考える。

(43)15世紀には鉄砲だけでなく、火薬さえ伝えられた。

(44)15世紀には鉄砲だけでなく、火薬でさえ伝えられた。

(43)(44)では、「鉄砲」と「火薬」が対比的にとらえられ、「サエ」「デサエ」はともに前接する語「火薬」を取り立てていると考えられる。

(45)a．15世紀には南蛮人が渡来しただけでなく、火薬さえ伝えられた。

b．15世紀には南蛮人が渡来しただけでなく、火薬が伝えられさえした。

(45)では「南蛮人が渡来した」に対して「火薬が伝えられた」が対比的にとらえられている。従って（45a）と（45b）は意味的には同義と考えられる。（45a）の「サエ」は直前の語「火薬」だけを取り立てているのではなく、（45b）に見られるように「火薬が伝えられた」という文全体を取り立てのスコープにしている。

一方、「デサエ」ではどうであろうか。

(46)a ？15世紀には南蛮人が渡来しただけでなく、火薬でさえ伝えられた。

b ＊15世紀には南蛮人が渡来しただけでなく、火薬が伝えられでさえした。

（46a）は少し落ち着きの悪い文である。「南蛮人が渡来した」と「火薬が伝えられた」が対比されているたにもかかわらず、「デサエ」が前接する語の「火薬」のみを取り立てているために文

として落ち着きが悪いと考えられる。「デサエ」が「火薬が伝えられた」と文全体を取り立てられないことは（46ｂ）の示すところである。

先の3.2.6で慣用句に「デサエ」が割って入れないことを見た。

(47)ａ．情けなく思うだけでなく、腹さえ立つ。

ｂ＊情けなく思うだけでなく、腹でさえ立つ。

（47ａ）は次のようにも言い換えられる。

(48)情けなく思うだけでなく、腹が立ちさえする。

「サエ」は（47ａ）において直前の語「腹」が取り立てているように見えるが、実は「腹を立てる」全体を取り立てていると考えられる。「デサエ」は前接する語だけを取り立て、「腹を立てる」という文全体を取り立て得ないために、「デサエ」が慣用句に割って入れないと考えられる。

以上の考察から「サエ」「デサエ」の取り立てのスコープは次のようにまとめることができる。

Ｎ＋「サエ」＋Ｐ（述語）→Ｎ及びＮ＋Ｐを取り立てる。

Ｎ＋「デサエ」＋Ｐ（述語）→Ｎを取り立てる。

4．考察

今までの観察で「デサエ」について次のようなことがわかった。

①「デサエ」は接続の仕方において自由分布しない。名詞、特に「ガ」格（主格）に付くことが多い。

②「デサエ」には並列例示の用法がある。

③「デサエ」は強調的意味合いが強い。

④　超格的（無格的）用法があり、文頭に出て、主題的振る舞いをする場合がある。

⑤「デサエ」のとるＮは特定名詞が多い。

⑥　Ｎに、Ｎを説明する連体修飾節が付く場合が多い。

⑦「サエ」が存在を表す動詞に結び付きやすいのに対し、「デサエ」は結び付きにくい。

⑧「サエ」は慣用句に割って入ることができるが、「デサエ」はできない。

⑨「デサエ」は専ら前接する語のみを取り立てる。

本節では「デサエ」に何故このような傾向があるのかについて考察を加える。

考察の順序は次のようである。

4.1　「デサエ」は断定の助動詞「ダ」＋取り立て助詞「サエ」である。

4.2　「デサエ」は条件を表す。

4.3　「デサエ」は主題性を持つか。

4.1　「デサエ」は断定の助動詞＋取り立て助詞「サエ」である

ここでは「デサエ」が断定の助動詞＋「サエ」であることについて検討を加える。3.1でＮ＋格助詞＋「デサエ」の格助詞に対する「デサエ」の接続の仕方は、強調構文での格助詞＋「ダ」と一

致することを見た。これは「デサエ」の「デ」が断定の助動詞「ダ」の連用形であると考え得る一つの根拠になる。ここでは、断定の助動詞「ダ」、そしてその連用形である「デ」の意味について考えてみたい。

時枝誠記（1950）は「指定（断定）の助動詞は話し手の単純な肯定判断を表す」として次のように述べている。

> そこには明らかに陳述性が認められる。助動詞は、辞に属するものとして、他の感動詞、接続詞、助詞と同様話し手の立場の直接表現である。

三上章（1955）は「陳述性が認められる」という時枝の主張を支持するとともに、「連用」を次のように2系列に分けている。

有格－格助詞－補語－名詞を本名的に使う

無格－準用詞－修飾－ニックネームの方向としていわば形容詞的に使う

三上は「ニ・ト・デ」が格助詞と準用詞[2)]の両方にまたがると述べるとともに、

> 無格の名詞は形容詞的に使われているから、形容詞と同じように副詞で修飾される。

とも言っている。今までの考察の中で「デサエ」が受ける名詞Nは次のような傾向を見せた。

①「デサエ」は「あの」「あんな」を持つNを受けやすく、強調的意味合いが強い。

②「デサエ」のとるNは特定化されたものが多い。

③　Nを説明する（評価する）連体修飾節がつく場合が多い。

①～③に共通する点はNが話し手の直接表現であるということである。これらのことは時枝、三上の主張につながると考えられる。「・・デサエ」において、陳述性を持つ「デ」を「サエ」が取り立てているために「・・」の部分に①～③のような話し手の直接表現が来やすいと考えられよう。

次の例は「デサエ」が断定の助動詞＋「サエ」であることを支持する例である。

> ⑷⑼これでは赤子がさぞ暑かろう、とは胸の内で考えるだけで、子に関わる話は<u>仮に寝言でさえ</u>喜和は口には出来ないのであった。　（櫂 287ペ）

三上が言うように、Nである「寝言」が形容詞的性格を持つために、副詞「仮に」が「(寝言)で」を修飾し「サエ」に結び付いていくと考えられる。

4.2　「デサエ」は条件を表す

ここでは前節で断定の助動詞＋「サエ」とされた「デサエ」の持つ仮定的意味合いについて考えたい。

⑸⑽子供でもわかる。

⑸⑴子供ではわからない。

⑸⑽は「子供であっても、わかる」という意味を持ち、「子供でも」は逆接の条件を表している。また⑸⑴は「子供であっては、わからない」という意味を持ち、「子供では」は否定的条件を表していると考えられる。

(52)子供でさえわかる。

(52)は、(50)とほぼ同様の意味合いを持ち、「子供でさえ」は「子供であってさえ」という逆接の条件を表していると考えられる。

条件節は、それが肯定条件であれば否定の、否定条件であれば肯定の意味合いを内包すると考えられる。

(53)安ければ買う。

(54)雨なら行かない。

(53)はその含意する意味として、「安ければ買う。しかし安くなければ買わない」を、(54)は「天気だったら行くが、雨だったら行かない。」という意味を持つ。冒頭で引用した次の例も同様に考えられる。

(3)A：日本人の名字の読み方はむずかしいですね。

B：ええ、日本人でさえ困ることがありますからね。

(3)において「日本人でさえ困る」の「日本人でさえ」は、「日本人でなければ（なおさら)」、従って「外国人であれば（なおさら)」という逆の意味合いを持つはずである。

(22)大人でさえ胃腸を損なうことが多いのですから、敏感な赤ちゃんの胃腸は・・・

これは3.2.2で見た「・・のだから」「・・のに」からの例である。「デサエ」の実例に(22)のような「X_1でさえ・・から、X_2は（なおさら）・・」という使われ方が多いことは、「デサエ」の持つ条件的性格によって、X_1から対比的なX_2が引き出されると言えよう。

また、3.2.3で見たような並列的例示表現も、「デサエ」の条件的性格によるものと考えられる。「X_1」から文脈的に逆の、また対等の立場に立つ語が引き出され、(25)のように「X_1であっても・・（し)、そしてX_2も・・」という用法に結び付いていったと考えられる。

(25)彼の実兄でさえ、「物好きなやつめ」と笑っていたし、大学の東洋美術の先生の中には・・・と切り捨ててはばからない人もいたのである。

最低条件を表す「・・さえ・・ば」構文の中には「デサエ」が現れなかった。
「デサエ」はそれ自体で条件を表しているため、「デサエ」が介入すると、条件節の中に条件節が入ることになり、構文的に非文法的となるのであろう。

(20)利息さえ払えばいいだろう。

＊でさえ

4.3　「デサエ」は主題性を持つか

3.2.4で「デサエ」の超格的用法を観察した。この「デサエ」の超格的、無格的性格は、「デサエ」の持つ条件的性格によると考えられる。条件節は節として主文の述語と修飾関係を持つが、格関係は持たない。従って(29)のように条件的性格を持つ「デサエ」がその文からは独立して、無格的に使われる場合が起こりうるのは自然と言うべきであろう。

(29)蛍でさえこの淵の上にだけは大きな鬼蛍が交うとういうのも、怖いとは知りながら魅入られ

たら逃げられぬ、その水の蒼さのせいなのかも知れなかった。

「デサエ」のこのような用法は、取り立て助詞「ハ」の用法とよく似ている。N＋「ハ」も主題化して文頭に出る。また、N＋「ハ」が何格か同定できないことも多い。

(55)場所は、室内説が圧倒的だった。

(56)カラフト犬は、かわいなそうなことをしましたね。

(57)詳しいことは、広報題三号を見てください。

このように「デサエ」が無格として「ハ」に近い振る舞いをする場合のあることは、「デサエ」に「ハ」の持つ主題（提題）機能があるのではないかという期待を抱かせる。「ハ」の語源が仮定条件を表す「～ば」であるという説も、「デサエ」が同じく条件を表すことを考えると、「デサエ」と「ハ」の共通性を感じさせる。この節では「デサエ」が主題（提題）機能を持つかどうかを考察することにする。

主題と解説はしばしば問題と答え、または課題と答えに喩えられる。

「田中さんは。」という問いに対し、「事務所にいます。」という答えがあったとき、そこに出来る文は、「田中さんは事務所にいます」となり、そこでは「田中さんは」が主題、「事務所にいる」が解説を表すことになる。

「デサエ」が主題となうるか否かを見るために、「デサエ」が、まず問題（課題）となりうるか否かを見てみることにする。

(58)　A：田中さんは？

　　Q：ええ、事務所にいます。

(59)＊A：田中さんさえ？

　　Q：ええ、事務所にいます。

(60)？A：田中さんでさえ？

　　Q：ええ、事務所にいます。

「サエ」「デサエ」とも問題（課題）にはなり得ないようである。しかし、「サエ」と「デサエ」を比べると「デサエ」の方が状況によっては可能な場合もありそうである。

(61)　A：みんな事務所に集まっているよ。

　　Q：ええっ、（あの）田中さんでさえ？

　　A：ええ、事務所にいますよ。

典型的な主題文（提題文）である名詞述語文では「サエ」「デサエ」はどのような振る舞いをするであろうか。次に名詞述語文における両者の振る舞いをみることにしよう。

(62)　鯨は哺乳類である。

(63)？鯨さえ哺乳類である。

(64)　鯨でさえ哺乳類である。

「サエ」は少し落ち着きが悪いようであるが、「デサエ」は名詞述語文で成り立つ。上の二つの

テストで見る限りは、「サエ」より「デサエ」の方がより主題的性格を備えていると言えるのではないだろうか。

三上（1972）は仮定法と「ハ」の関連について次のように述べている。

> 提示法は一つのムウドなのである。
>
> 源太<u>ト来タラ</u>　向ウ見ズダカラナ
>
> 平次<u>ト言ヘバ</u>　モウ来サソウナモンダガ
>
> 藤三<u>ツテ（バ）</u>　今日ハドウカシテルヨ
>
> の傍線の仮定法自身の格のカテゴリイを適用することはできないが、「何々ハ」もこういう仮定法の仲間と見なければならない。（中略）仮定法から提示法へ、形式にはちょっとギャップがあるけれども、心持ちにはほとんど隙間が感じられない。これも古典的な例だが、桜の「花の吉野」に対して
>
> 梅<u>ハ</u>、ヤッパリ月瀬ダ
>
> 梅<u>ナラ</u>、ヤッパリ月瀬ダ
>
> と言うとき、言う人自身の心持ちにはほとんど使分けが感じられていないのではあるまいか。

三上の例に「サエ」と「デサエ」を当てはめてみよう。

(65) 梅は、やっぱり月瀬だ。

(66) 梅なら、やっぱり月瀬だ。

(67)？梅さえ、やっぱり月瀬だ。

(68) 梅でさえ、やっぱり月瀬だ。

ここでも「サエ」より「デサエ」の方が落ち着くようである。

5．おわりに

次の表は3．4での観察及び考察をまとめたものである。左側の項目に対して、「サエ」「デサエ」そして「ハ」がどのように適応するかをO、X、△、？で示してみた。△は適応したりしなかったりするもの、？は適応するか否かが判断できなかったものである。

	「サエ」	「デサエ」	「ハ」
①接続の仕方（名詞）	O	O	O
（名詞＋格助詞）	O	△	O
（用言）	O	X	O
②文性（名詞述語文）	？	O	O
③構文（最低条件～ば文）	O	X	X
（理由～のだから）	？	O	△

（逆接～のに）	?	O	△
（並列例示）	X	O	O
④述語（存在）	O	?	O
（慣用句）	O	X	O
⑤無格性（超格性）	?	O	O
⑥前接するN	不定多し	特定多し	特定多し
〃　（あんな＋N）	X	O	O
⑦意味的特徴（強調）	O	O	?
⑧取り立て度	O	O	△
⑨主題性	?	△	O
⑩取り立てスコープ	文	語	文
⑪係り性	O	?	?

取り上げた項目で見ると、接続、慣用句、取り立てのスコープでは「サエ」と「ハ」は共通するが、他の項目では「サエ」より「デサエ」の方に共通点が多いようである。

本小論では3で観察を中心に、4で考察を中心に「サエ」と「デサエ」の異なりについて考えてきた。「デサエ」は形態的には断定の助動詞「ダ」の連用形＋取り立て助詞「サエ」であり、接続の仕方、取り立てのスコープなどにおいて一つの助詞とみなすには制約があった。しかし「ハ」とのいくつかの共通性（並列例示、超格的用法、主題的機能など）を見ると、「デサエ」は断定の助動詞「ダ」＋「サエ」の意味、機能を果たすに止どまらず、一つの助詞としての意味、機能を備えつつあると考えることができる。仮定条件を表す「ナラ」が「ハ」に近い意味、機能を持ち、助詞的な役割を果たしていると同様に、「デサエ」も意味的、機能的に，非常に助詞的な資格を備えた、言い換えれば、助詞化したものとしてとらえることができるのではないだろうか。

(注)

1）取り立てのスコープについては沼田義子（1986）に言及がある。

2）三上は、品詞を自立詞と付属辞に分け、付属辞には助詞と準(品)詞を入れている。準詞は準体詞と準用詞に分かれ、準用詞は連用成分としての機能を果たす付属辞である。重要な三準用詞に、「デアル」(断定)、「ラシイ」(推定)、「カ」(疑い）がある。

山田孝雄　1936　『日本文法学概論』宝文館出版

松下大三郎　1928　『改撰標準日本文法』勉誠社

時枝誠記　1950　『日本文法　口語法』岩波新書

佐久間鼎　1956　『現代日本語法の研究』くろしお出版（1983年改定版）

三上　章　1953　『現代語法序説－シンタクスの試み』くろしお出版（1972年復刊版）

―――　1953　『現代語法新説』くろしお出版（1972年復刊版）

寺村秀夫　1981　「ムードの形式と意味(3)」『文芸言語研究言語篇』筑波大学

森田良行　1980　『基礎日本語２』角川書店

沼田義子　1986　「とりたて詞」『いわゆる日本語助詞の研究』凡人社

国立国語研究所　1951　『現代語の助詞・助動詞』秀英出版

松村　明篇　1971　『日本文法大辞典』明治書院

日本語教育学会　1982　『日本語教育事典』大修館書店

(例文出典)

『INTEGRATED SPOKEN JAPANESE Ⅰ』アメリカ・カナダ大学連合日本研究センター

『櫂（上）（下)』(宮尾登美子)　中央文庫

『五弁の椿』(山本周五郎）中央文庫

『人間失格』(太宰治）中央公論社

『国際政治』(高坂正堯）中公新書

『米と日本人』(篠田統）角川書店

『零の発見』(吉田洋一）岩波新書

『天声人語』(朝日新聞）原書房

読売新聞、日本経済新聞